青森大学付属総合研究所紀要 Vol.21,No.1/2,52-56,March,2020

【資料】

「こどものまち」イベントにおける消防団の活動に関する実践報告

Practice report about the activity of the Volunteer fighter's
in the "Kodomo no machi" event.

中沢　翔馬

青森大学付属総合研究所・宮古市消防団

１.背景

常備消防（消防組織）が機能的に充実したといわれる現代においても，消防団の有する人員の動員力や即時対応力が地域防災・災害対応に対する寄与は依然として大きい．近年の東北地方に限っても，2011 年の東日本大震災，2016 年台風 10 号災害や 2019 年台風 19 号災害など，発災時から発災直後にかけて懸命な活動にあたった消防団員の姿は記憶に残っているのではないだろうか（日本消防協会編，2012 など）.

一般的に火災や災害といった非常時に姿が見えやすい消防団であるが，宮古市においては，お盆期間や冬期間の警戒活動にあたる消防団員の姿がなじみ深い．宮古市では火の取り扱いが増える時期や火災が起こりやすい気象状況が続く期間に，盆火警戒・冬季警戒という警戒活動をおこなっている．この警戒活動はほとんどの場合，消防ポンプ自動車に 3～4 名の消防団員が乗車し，回転灯を点灯させ警鐘を吹鳴のうえ管轄地域内を巡回する．このような消防団員の姿は，宮古市においては現在でも一般的であり，消防団の認知度は高い状況にある．しかし，認知度の高さと消防団への加入は比例関係にあるものではなく，消防団員の減少と高齢化が進むなかで新入団員の確保は依然として厳しい状況にある．消防団を管轄する総務省消防庁では，大学生など若い世代向けのチラシやポスターを作成しているが，ターゲットの目に入っているか，別途議論する必要がある.

実際の新入団員の勧誘は，消防団員および消防団 OB による「声掛け」がいまだに主流である．筆者が新入団員確保の方法についてほかの消防団員と意見を交わすなかで，新社会人や U ターン者にピンポイントでアプローチするのではなく，小学生など幼少期から継続的に消防団を PR し認知度を高めていくことが，新入団員確保につながるのではないか，という考えにいたった．そのような流れのなかで，偶然にも声が掛ったのが，「こどものまち」イベントへの参加であった.

２.「こどものまち」とはなにか

本節では，「こどものまち」というプログラムのきわめて簡単な概要と，宮古市でおこなわれている「こどものまち」プログラムである「みやっこタウン」の概要についてあわせて説明をおこなう.

「こどものまち」とは，子どもたちの遊びで作られる架空の「まち」のなかで，子どもたちが主体となり就労・余暇・社会活動を体験するプログラムである.「こどものまち」プログラムがはじまった

経緯や理念，国内外の実践例をまとめた木下勇，卯月盛夫，みえけんぞう（木下・卯月・みえ 編 2010）らは,「こどものまち」がどのようなイベントか，以下のように説明している.

「こどものまち」とは，すべてが子どもたちの遊びで作られる模擬都市であり，ミニチュア版のまちのことである. そしてそのまちの中では，子どもたちが主体となって,「仕事」をし,「給料」を得て，それを自由に使っていく営みを通して，まちのさまざまな仕組みを理解するだけでなく，まちをよりよく変えていく，そんなダイナミックな遊びが展開する取り組みである（木下・卯月・みえ 編　2010: 14）

「こどものまち」プログラムとは, 単なる職業体験ではなく，子どもたちの主体的な選択に基づき就労・消費・余暇の体験し, それを通じて社会全体の仕組みの理解に結びつけていくものといえる. この「こどものまち」は, ドイツのミュンヘン市で 1979 年からおこなわれている「ミニ・ミュンヘン」が，モデルとなっている（木下・卯月・みえ 編 2010: 19-21）.

宮古市での「こどものまち」は,「みやっこタウン」という名称で 2016 年に初回が開催された. 主催はみやっこタウン実行委員会で，同委員会は NPO 法人みやっこベース, 宮古市社会福祉協議会, 陸中宮古青年会議所などで組織されている．これまで, 2016 年 30 ブース 84 名（小学 4 年～6 年），2017 年 41 ブース 178 名(小学 3 年～6 年)，2018 年 50 ブース 239 名（小学 3 年～6 年）と年々規模を拡大しての開催となっている．第 1 回から第 2 回は「仕事」と「消費」が中心であったが，第 3 回より「まち」を仕組みのひとつとして「地域活動」があらたに加えられた．具体的には，宮古市社会福祉協議会が窓口をつとめる「地域活動センター」をつうじて, 消防団, 防災士, 認知症サポーター, ボランティア活動の各ブースで活動に取り組む. 第 4 回となる 2019 年は，それまで会場となっていた宮古市総合体育館シーアリーナから宮古市民文化会館に会場を変更し，2019 年 6 月 16 日に実施された．当日は小学 4 年～6 年の児童 200 名が参加し，55 ブースでさまざまな活動に取り組んだ.

３. 宮古市消防団による活動内容

宮古市消防団は，2018 年の第 3 回から参加し，2019 年が 2 度目の参加となった．参加者は，宮古市消防団本部の高田由美本部付部長を筆頭に, 6 名の消防団員（筆者を含む，うち女性団員 4 名）で，両回とも人員は変わらず，筆者が事務局となり実行委員会との連絡調整をおこなった.

3-1. 2018 年

2018 年，消防団員は，半纏，前掛け，略帽，半長靴（革靴）という消防団の正装である乙種装用で参加した. 2018 年におこなった具体的な活動内容とその流れは以下のとおりである.

1. 地域活動センターによる，地域活動の紹介と各活動への参加者の振り分け.
2. 消防団ブースでの受付, 児童による名札の記入.
3. 半纏への着替えとヘルメットの装着.
4. 消防団の活動内容の説明．規律訓練として「敬礼」の実施.
5. 拍子木を鳴らしながら館内を巡回し，チラシを配布の火の用心を呼びかけ.
6. 屋外に出て水消火器の使用訓練.
7. 活動のふりかえりと活動証明書の授与.

この時は，プログラムに地域活動が取り入れられた初年度ということもあり，運営方法など実験的な側面も大きかった．また，宮古市消防団においても，小学生を対象とした取り組みが初めての経験で，手探りの状態でイベントを迎えることとなった．消防団についての説明は，おもに高田本部付部長と筆者が担当した．水消火器の使用訓練

は，ベテランの男性団員が担当し，火の用心の呼びかけや活動全体のサポートを 3 名の女性団員が担当した．1 回あたりの活動時間は 20 分で最大 4 名の受け入れとした．4 名での活動は 3 回 ，2 名 1 回，1 名 1 回の計 15 名の児童を受け入れた．

上記の活動 4 において，消防団についての知識の有無を質問している．「消防団を知っているか」というレベルでは児童らの認知度は高く，ほとんどの児童が消防団のことを知っていると答えた．具体的には「火事の時に火を消している」「お盆とか冬とかに消防車でカンカン鳴らしている」と，消防団の活動する様子を答えた．また，祖父や叔父が消防団員であるという児童も数名いた．

2018 年の開催は，8 月中旬ということもあり花火で遊ぶ機会もある時期ということで，ほかの参加児童向けに花火で遊ぶ際の注意点を掲載したチラシを配布しながら火の用心の呼びかけをおこなった．拍子木を鳴らし「マッチ一本火事のもと」と声掛けをしながら，女性消防団員とともに館内を巡回した．活動のなかで児童がもっとも積極的に取り組んだのが，水消火器の使用訓練である．消防団員による水消火器の使用法と使用する際の注意点の説明を受け，5 メートルほど離れた火点(的)に向かって放水をおこなった．火点に水が命中すると，児童は歓声を上げた．最後のふりかえりでは，一連の活動をふりかえり火の用心と水消火器の使用法の注意点を再確認した．

実行委員会が実施したイベント後のアンケートから児童からの感想をふりかえる と，「水消火器を使ったことが楽しかった」「水消火器をまたやりたい」と高評価が得られた．一方で，座学形式でおこなった消防団の説明についての回答は得られなかった．そのほかアンケートの回答ではないものの，「半纏」を着ることに抵抗を感じたり，「半纏」を着たくないから活動に参加しなかったという，女子児童の意見も聞こえてきた ．

3-2. 2019 年

2019 年におこなった具体的な活動内容とその流れは以下のとおりである．

1. 地域活動センターによる，地域活動の紹介と各活動への参加者の振り分け．
2. 消防団ブースでの受付，児童による名札の記入．
3. 消防団についての知識の有無について児童へ質問，防災紙芝居．
4. 屋外に出て水消火器の使用訓練．
5. 活動のふりかえりと活動証明書の授与．

2019 年は，前年の参加者の声をふまえ 2 点の変更をおこなった．ひとつめは「説明方式」から「Q&A 方式」への変更である．2018 年は消防団を知ってもらおうという意識を前面に押し出し，座学形式で消防団について説明をおこなった．しかし，小学生向けに短時間でわかりやすく消防団について説明することは容易ではなく，また印象に残りにくいという反省があった．そこで，総務省消防庁が防災教育向けに作成した紙芝居をもちいて，防災クイズをおこなった．Q&A 方式でおこなうことで，児童からの発言（リアクション）も得やすく，また説明する消防団員も原稿を見ながらもアドリブで対応することも可能で，両者に対して高評価であった．

また，服装について女子児童から評価を得られなかったことを改善するために，服装の多種化をおこなった．消防団員は，昨年とおなじ乙種装用のほか，訓練時に着用する活動服，女性団員にのみ支給されているブレザータイプの甲種装用の 3 タイプを着用．児童は水消火器の使用時のみ，消防団員が消火活動時に実際に着用する防火服を羽織る形式へ変更した．当日はあいにくの雨天で水消火器の使用は，屋外に設置したテントの中で実施したため問題なくおこなわれた．防火服の着用については，前年の半纏とくらべ着替えもスムーズにおこなわれ，「本物でかっこいい」と児童からも好評であった．

2019 年の受け入れはのべ 21 名で，なかには前年から 2 年連続で参加した児童や 1 日で 2 回参加した児童もいた．実行委員会によるアンケート では，一番楽しかったブースとして消防団を選び，その理由として水消火器の使用を挙げていた．また，保護者対象のアンケートの「イベント後子どもと話した内容」について自由記述を求める設問にたいして，「(防災紙芝居で学んだ）てんぷら油から火が出た時の消し方を教えてくれた」「将来，消防団員になりたいと言っていた」「将来消防団になってねと言われ喜んでいた」と児童から保護者にたいして消防団活動の感想を話していたことがわかった．

４. おわりに

本稿では，宮古市消防団が参加した，「こどものまち」イベントみやっこタウンにおける消防団の活動について，参与観察と参加児童およびその保護者を対象としたアンケートにもとづき，その実践を報告することを目的としてきた．

まず，2018 年と 2019 年の取り組みをそれぞれふりかえった．

2018 年のみやっこタウンでは，初めての参加ということで手探りでの実施であった．座学形式で活動内容を説明し「消防団を知ってもらう」ことに重きをおいたが，児童向けアンケートからそれに対する回答は得られなかった．一方で，水消火器の使用訓練は児童からの反応も良く，次年度に向け手応えを感じさせるものであった．

2019 年のみやっこタウンでは，2018 年の経験と反省を生かして Q&A 方式を取り入れたことから児童の発言を促すことができ，またそこで学んだ防災知識を自宅に持ち帰り保護者に共有するなど，防災意識の向上に寄与したと評価できる．参加した児童の 1 人は「去年消防団に来て楽しかったから今年も来た」という 2 年連続で消防団活動に取り組んだ事例もあり，2 度目の参加でみやっこタウンにおける消防団の存在感も高まったといえる．また，前節でとりあげた保護者からのアンケート結果は，小学生の消防団活動の理解度が高まったことを示す一例といえる．

次回以降のみやっこタウンにも宮古市消防団は参加を予定している．その上で，今後の実施について展望と課題について整理し本稿を締める．「水消火器」を使った活動ができるという点は，とくに男子児童にとって好評で，「水消火器をやるために消防団に来た」という児童も多かった．これまで 2 回の参加で，「消防団＝水消火器」というみやっこタウンにおける消防団の認識が出来たことは，次回以降の強みといえる．他方で，今後，開催場所が変更され，屋外や水が使用できないといった制約が生じる場合も視野に入れ，水消火器に頼らず消防団活動を体験できるプログラムの作成が必要となる．もうひとつの課題は，参加する消防団員の確保である．これまで参加した 6 名は，筆者を除くと本部付の 4 名の女性団員と 1 名の男性団員である．筆者が以前おこなった聞き取り調査において，女性団員は火災・災害現場での活動だけでなく，防火防災の啓発活動にたいする関心が強いことがわかった．男性団員が関心を示しにくく，見逃しがちな，子どもに対象を絞ったみやっこタウンでの活動は，女性団員が主体的に取り組むことが可能な活動のひとつといえる．つけくわえると，みやっこタウンでの活動がきわめて男性中心な「消防団社会」における，女性団員の「関わりしろ」，活動実績を「見せつけられる」格好の場になるだろう．

だが，上記のような活動が，女性団員と少数の男性団員のみでおこなわず，若手，ベテラン問わず男性団員が積極的に参加する体制へ移行する必要があるだろう．そのような，小学生から継続して将来の消防団員を育成していく機運が，5 年後 10 年後の新入団員確保と地域防災力の維持へと繋がってくるだろう．

◆参考文献

木下勇・卯月盛夫・みえけんぞう 編，2010,『こどもがまちをつくる「遊びの都市－ミニ・ミュンヘン」からのひろがり』萌文社.

宮古市消防団史編集委員会，2019,『続 宮古市消防団史――昭和後期から平成』宮古市消防団.

日本消防協会編, 2012,『消防団の闘い――3.11 東日本大震災』近代消防社.